

ゾロアスター教における聖なる火：ナオサリの事例 を中心として

中別府，温和

<https://doi.org/10.15017/2328586>

出版情報：哲學年報．42，pp.29-52，1983-01-31．九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ゾロアスター教における聖なる火

——ナオサリの事例を中心として——

中 別 府 温 和

序

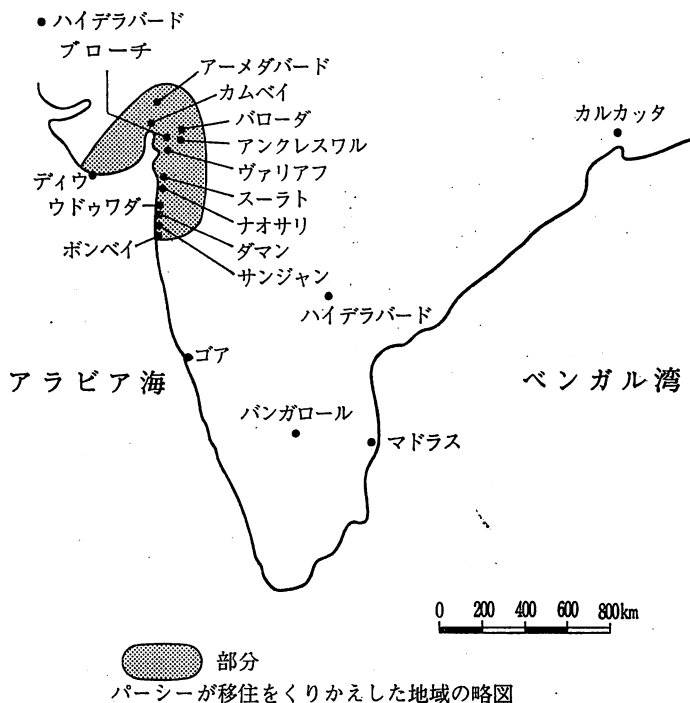
ゾロアスター教 (zoroastrianism) の宗教的 思考に 接近するために、現存のゾロアスター教徒パーシー (the Parsis)¹⁾ の社会を研究の対象とする。パーシーは 8 C¹⁾ 中葉から 11~12C にかけて ペルシャから インドに移住したゾロアスター教徒 (the Zoroastrian; the Zaratušts) である。91,266 名の信徒のうち 8 割 (72,266 名) はマハラシュトラ州 (Maharashtra State) のボンベイに集中し、残りはグジャラト州 (Gujarat State) をはじめ主にインド西北部に散在している (略図参照)。

研究の方法は、アヴェスタ (Avesta およそ 3 C 以前ならびに 3 C~6 C 前後のゾロアスター教の姿を含む文献)、パーラヴィ (Pahlavi およそ 3 C~10 C のゾロアスター教の姿を含む文献)、グジャラティ (Gujrati 14 C 以降のインドにおけるゾロアスター教の姿を含む文献) に接しつつ、ナオサリ (Navsari)²⁾ においてフィールドワークを行なう。ナオサリをフィールドワークの対象に限定した理由は以下のごとくである。(1) パーシーのインドにおける歴史を通して、ナオサリはバガサス祭司³⁾ (the Bhagarsath Priests; あるいはバガリア祭司, the Bhagaria Priests) の拠点であり続けている。パーシーの社会は、祭司系譜に属するパーシー (166 世帯 417 名) と平信徒 (563 世帯 1,909 名) から構成されている。それぞれの居住区域は明確に異なり、通婚はかつてのように禁じられてはいないがきわめて希である。後に言及する 聖なる火も 別々に維持している。祭司系譜に属するパーシーは、「5 つの柱」⁴⁾ と呼ばれる 5 つの家系に

よって各自の出自をたどる。バガスス祭司系譜に属するパーシーは、パーシーの社会の中で最高の権威をはこる祭司系譜集団である。この頂点に立つ祭司長メルジ・ラーナ (Dasturji Meherji Rana 15 代目メルジ・ラーナ) は、パーシーが開くいかなる集会でもその議長をつとめる権利を有する。ボンベイにある4つのアートシュ・ベーラーム (Ātaś Bahrām パーシーの維持している3つの聖なる火の中で最も等級の高い火。これについては後に言及) のうちの3つはバガスス祭司系譜に属するパーシーによって維持されている。ナオサリのアートシュ・ベーラームを加えると4つのアートシュ・ベーラームを維持していることになり、インドでパーシーが維持するアートシュ・ベーラームの半分に相当する。さらに、バガスス祭司はメルジ・ラーナ図書館に最も古く重要な写本を保ち、たえずその文献に立ちかえりつつ儀礼を行なっており、ゾロアスター教に伝統的な部分をより多く保っていると考えられる。(2) ナオサリからは、パーシーのあいだで尊敬をあつめている人材が数多く出ている。代表的人物は、タタ (J.N. Tata, 1839~1904) やジャムシェドジ・ジジボイ (Jamshedji Jejeebhoy, 1785~1859) 等である。(3) ナオサリはボンベイから北に 240 キロ、アラビア海から 19 キロの沿岸に位置する。グジャラート州に属し、人口約 8,000 人。ヒンドゥ (Hindus)、ムスリム (Moslems)、ジャイナ教徒 (Jains)、シンディ (Sindhis) 等が共に生きている。6 月中旬~9 月中旬を雨季で過し、残りを乾季で過し、農業、漁業、繊維業が営まれている。ナオサリの中心部 (略図に示した部分) は徒歩でも 20~30 分で縦横断できる範囲にあり、ここに 729 世帯、2,326 名のパーシーが住んでいる。単独で長期にわたって集約的にフィールドワークを進めていく上で数や地理的範囲の点で操作が可能な地域と考えられる。

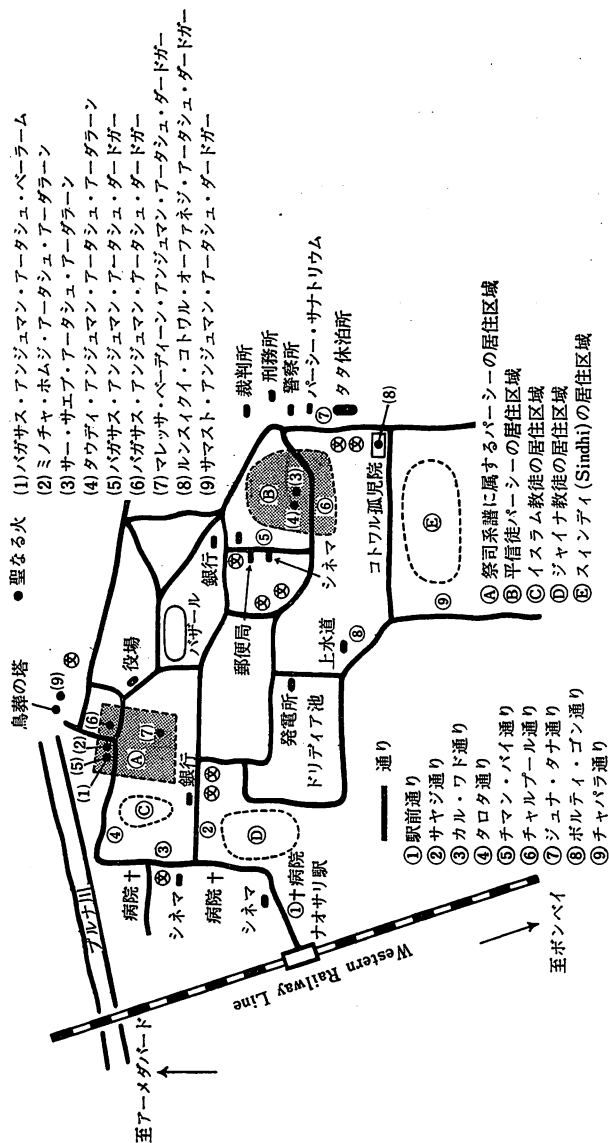
ナオサリでのフィールドワークは、ゾロアスター教の中核を占めると考えられる聖なる火と鳥葬の塔に集中してきた。ここでは聖なる火を中心にとりあつたていく。

●デリー



I

パーシーは3種類の聖なる火を維持している。これらは火をつくる過程の儀礼、火に燃料を加える儀礼(グイbui)⁵⁾、火への祈り(アータシュ・ニーアーシュ *Ātaš Niyāyeš*)⁶⁾等を通してその他一般の火と区別され、それらの儀礼とそれぞれの火を構成する内容にしたがって上下の等級があり、高い方からアータシュ・ベーラーム (*Ātaš Bahrām*)、アータシュ・アーダラーン (*Ātaš Ādarān*)、アータシュ・ダードガー (*Ātaš Dādghāh*)と呼ばれる。語源的にはそれぞれ、「戦勝の火 (the victorious king of fires)」, 「もろもろの火のための火 (a fire for fires)」, あるいは「もろもろの火からなる火 (a fire of fires)」, 「法の認める正しい場所の火



ナオサリの略図

ナオサリの略図

(the fire in a lawful, proper place)」と理解できる。

アータシュ・ペーラーームは16の異なる火から構成されている。16の火を集め、清祓し、聖別し、最終的に一つの火に統一する。16の異なる火の内容について簡単にふれると以下のごとくである（西日本宗教学雑誌、1981年第6号 pp. 26-29 参照）。(1) 死体を焼く火、(2) 染め物師の使う火、(3) 統治者の家の火、(4) 焼物師の使う火、(5) レンガ作りの使う火、(6) 苦行者の使う火、(7) 金細工師の使う火、(8) 貨幣の鑄造に使う火、(9) 鍛冶屋の使う火、(10) 兵器の製造に使う火、(11) パン焼きに使う火、(12) 酒造に使う火、(13) 軍人の使う火、(14) 羊飼いの使う火、(15) 落雷によって生じた火、(16) ゾロアスター教徒の家で使う火。

アータシュ・アーダラーン⁹は4つの異なる火から構成されている。(1) 祭司長（ダストゥルジ Dasturji）の家の火、(2) 祭司（モーベッド Mō-bed、あるいはエルワド Ervad）の家の火、(3) 平信徒（ベーディン Behdin）の中の指導者の家の火、(4) 寄進をした人¹⁰の家の火、を集め、清祓し、聖別し、最終的に一つの火に統一する。

アータシュ・ダードガーは、ゾロアスター教徒の炉床から得られた一つの火を、清祓し、聖別したものである。通例、祭司長か祭司の家の火をアータシュ・ダードガーに用いる。

パーシーの聖なる火はグンバッド（gumbad）と呼ばれる聖火壇におさめられている。いったん聖火壇におさめられると、火は決して絶やされてはならない。さらに、それぞれがまったく独自の存在とみなされ、これ以後他の火と混ぜ合わされたり¹¹、また火が二つ以上に分かれたりすることは決してない。ただし、アータシュ・ダードガーは例外である。アータシュ・ダードガーには、(1) 宗教儀礼の行なわれる場所（ウルウィース・ガー Urwis-gah またはヤザシュナ・ガー Yazašna-gah）の内に儀礼にのみ用いられるべく保たれているものと、(2) 聖火壇におさめられて、アータシュ・ペーラーームやアータシュ・アーダラーンと同じようにパーシーの祈りの対象になるものとがあり、(1) については宗教儀礼のごとに、いく

つに分かたれてもよい。

聖火壇におさめられた火にはガー (Gāh) のはじめごとに、燃料が加えられる。ガーはパーシーが一日を刻む時間の単位で、(1) 日の出から真昼まで (ハワン Havan), (2) 真昼から午後の中頃 (ラピスウィン Rapiθ-win), (3) 午後の中頃から日の入りまで (ウズィラン Uziran), (4) 日の入りから真夜中まで (アイウィスルスレム Aiwisruθrem), (5) 真夜中から日の出まで (ウシャヒン Usahin) のごとくである。燃料には、パワル、ビャクダン、シタンなどの常緑喬木を乾燥させて用いる⁹⁾。燃料の加え方については一定の儀礼があるが、ここでは言及しない (注 (5) 参照)。

ナオサリには9つの聖なる火がある。アータシュ・ベーラーム1, アータシュ・アーダラーン3, アータシュ・ダードガー5¹⁰⁾ のごとくである。成立年代は、18 Cの中葉から20 Cの初めにわたる。ナオサリの聖なる火について注目すべきことのひとつは、それぞれの火を維持してきた主体が異なることである。すでにふれたように、ナオサリのパーシーは、祭司系譜に属するパーシーと平信徒に分かれ、祭司系譜に属するパーシーは、バガスとノン・バガスに分かれている。祭司系譜に属するパーシーと、平信徒のそれぞれの居住区域は明らかに異なり、通婚はかつては禁じられ今日でもきわめて希である。聖なる火は、祭司系譜に属するパーシーと平信徒によってまったく別々に維持されてきた。さらにバガスとノン・バガス¹¹⁾ によっても別々に維持されてきた。聖なる火を維持する主体が異なるという意味は次のごとくである。聖なる火をつくり、聖火壇におさめ、聖火殿を建て、あるいは修復しつつ、その中でたえず聖なる火を維持すべく、特定の祭司に宗教儀礼を委任していくのに必要な財物をまかなう主体が異なる。異なる火に燃料を加え、火を絶やさないようにしうるのは祭司のみであるし¹²⁾、聖火殿の中で行なわれる宗教儀礼は、たとえそれが祭司系譜に属するパーシーから指示されたものであれ平信徒から指示されたものであれ、特定の祭司のみが行ないうるものであるから、この意

味で祭司はすべての聖なる火に深くかかわっている。しかし、聖なる火に燃料を加え、聖なる火に祈りを唱え、聖火殿の中で宗教儀礼を行ないつつ聖火の維持の一部を担っている祭司たちは、それぞれのパンターク（*panthāk* 仏教における檀家に類似している）をもつ。パンタークは小さいもので10世帯、大きいもので100～200世帯にいたる。祭司は一定の経済的報酬のもとで、誕生、イニシエーション、婚姻、葬送に関した宗教儀礼、死者の靈魂のための宗教儀礼、祝祭における宗教儀礼をそれぞれのパンタークの家の中で、あるいは聖火殿の中で行なう。聖火殿は10～15のパンタークの上になりたっている。パーシーの生活は、パンタークを通して聖火殿との深いつながりをたもちながら展開している。パーシーであるかぎり、どこどの聖火殿に入ることもさまたげられないし、その中で祈ることも自由である。しかし、パーシーの現実の生活と深くつながっているパンタークはそのまま保たれる。

このような意味で、聖火殿を維持する主体が異なるということは、その維持にかかる経済的負担をまかなう主体が異なるだけにとどまらず、祭司を通してパンタークによって聖火殿にかかわる主体も異なってくるのである。それぞれの聖火殿はきわめて独自性が強い。聖なる火そのものも決して2つに分かたれたり、2つの聖なる火が1つに混ぜ合わされたりされないし、さらに聖なる火を消してしまうことはあってはならない、という意味で独自性をもっているが、つぎにとりあげるブローチにおける聖なる火に関する一件は聖火殿の独自性の一面をよく描きだしている。ナオサリの近くのブローチ（*Broach*）で、祭司の不足と聖火殿を維持する費用の不足から、アータシュ・アーダラーンが消失してしまった。聖なる火を消してしまうことは決してありえないことのはずなのに、パーシーはこれについてまったく無関心ではなかったにしても、結果的にはこれを立てなおそうとはしなかった。

また、聖火殿を建て、これを維持し修復していくことが、個人、一族、を単位として担われ、しかもそれぞれが関わりあいをもつ故人の靈にささ

げてその行為がなされることがすぐれて多い。ナオサリにおいては9つの聖なる火のうち8つがそうである。パーシー全体についてみると、8つのアータシュ・ベーラームの中の7つがそうであるし、133の聖なる火ならびに聖火殿のうち118（約9割）がそうである。

聖なる火については、先にふれたように、定められた儀礼を加えて一般の火と区別している。パーシーが火一般に関心をはらわないというのではない。ナオサリにおいては、自分の家の一角とりわけ台所の近くの片隅に火をともしつづけ、その火を料理には用いず、もっぱらその火の前で祈るためにだけ保っている。パーシーがパーシー以外の人々の使う火についてどのように考えているかについてはいまだに調査をしえず、その内容にふれることはできないが、少なくともパーシーの社会の内では一般の火についても大切にとりあつかう。小さな容器に油を入れ、灯心をひたし、火をたもつ行為はほとんどのパーシーによってなされている。

しかし、パーシーは、そのような火と、聖火殿に維持されている聖なる火とは区別している。質的な差をそこに見いだし、3種類の聖なる火の等級に応じてその聖度が異なると意識している。先にふれたように、パーシーはパンタークを通してそれぞれの聖火殿とつながり、祭司によっていろいろな儀礼を行なってもらう。アータシュ・アードラーンのパンタークとして祭司に儀礼を行なってもらった場合とアータシュ・ダードガーのパンタークとして祭司に儀礼を行なってもらった場合、その儀礼そのものへのパーシーの評価は同じである。なぜならば、儀礼に用いられる聖なる火はいかなるときもアータシュ・ダードガーでなければならないからである。しかし、その儀礼を行なう前にしろ行なった後にしろ、アータシュ・ベーラームにでかけ、そこで祈るパーシーはきわめて多い。アータシュ・ベーラームの灰¹³⁾のみが聖なる灰だということはほとんどのパーシーが知っている。ナオサリのアータシュ・ベーラームやウドゥワダ(Udvada)のアータシュ・ベーラームを巡礼するパーシーも少なくない。

ここで、パーシーのあいだでつくられ維持されてきた聖なる火のうちで

もっとも等級の高いアートシュ・ベールームについて、その収集の過程にかぎって言及していく。収集の儀礼につづく、火を清祓する儀礼、聖別の儀礼に関する内容は別稿にてふれる。アートシュ・ベールームに限定した理由は、先にもとりあげたように、この聖なる火はパーシーによってもっとも聖度が高いと考えられていることのほかに、バガス祭司によって維持されているからである。ゾロアスター教の伝統的な部分を多く保っていると思われるバガス祭司の慣行にそって、聖なる火の収集の儀礼を記述し、アヴェスタ、パーラヴィ、グジャラティの文献を参照しつつ古い部分とのつながりを見いだそうとするばかりでなく、現存するゾロアスター教徒、パーシーの社会における姿をとらえていこうとする。

II

アートシュ・ベールームは16の異なる火から構成されていることはすでに述べた。16の火のなかの1つは死体を焼く火¹⁴⁾である。火を収集する儀礼はこの死体を焼く火についてのみとりあげる。16の火の収集の儀礼には、後にふれるように若干の相違がみられるが、その他の内容については死体を焼く火の収集の儀礼に言及していくことで十分であろう。パーシーは決して死体を焼かない。この場合は非ゾロアスター教徒によって死体は焼かれている。平信徒のパーシー一人が、死体を焼いている非ゾロアスター教徒のもとへ行き、死体を焼いている火の一部をとりだしてくれるように頼む。これを拒まれたり、死体が焼かれている場に非ゾロアスター教徒がいなるときは、パーシーはつぎのような儀礼にうたえて死体を焼いている火をとりだす。平信徒のパーシー二人が身体を浄める儀礼（パードヤーブ・クスティ *pādyāb kustī*）¹⁵⁾を行ない、二人の間に手で紐を保ち（パイワンド *Paiwand*）¹⁶⁾、死者の靈魂を守護する天使（ヤザタ *yazata*）、サローシュ（*Sarōš*）¹⁷⁾のための祈りを唱え（サローシュ・バージ *Sarōš Bāj*をアシェ *ašahe*の箇所まで）、死体が焼かれているところへ行く。二人は一方の手に、穴のあけられた鉄製の杓（チャマチ *čamač*）をもち、そ

の上には粉状のビャクダンと乳香が盛ってある。この杓を死体を焼いている火の上方およそ 36~40 cm に保ち、自然に燃えつかせる。こうして得られた火は、空き地の地面に置かれる。二人の平信徒は今や祈り（バージ Bāj）を終え、清祓儀礼（リマン rīman）¹⁸⁹ を行なわねばならない。空き地の地面に置かれた火から約 30~40 cm 離れた地面に、粉状のビャクダンと乳香を盛る。この際は、風の力を利用し、風上に置かれた火は風の方でビャクダンと乳香に自然に燃えついていく。もとの火は消失してよいが、燃えついた方にはビャクダンと乳香があらたに加えられる。この作業は死体を焼く火については 91 回くりかえされるが、その他 15 の火については、くりかえされる回数が異なっている。以下それを示す。染め物師の使う火 80 回、統治者の家の火 70 回、焼物師の使う火 61 回、レンガ作りの使う火 75 回、苦行者の使う火 50 回、金細工師の使う火 60 回、貨幣の鑄造に使う火 55 回、鍛冶屋の使う火 61 回、兵器の製造に使う火 61 回、パン焼きに使う火 61 回、酒造に使う火 61 回、軍人の使う火 35 回、羊飼いの使う火 33 回、落雷によって生じた火 90 回、ゾロアスター教徒の家で使う火 184 回、のごとくである。最後のゾロアスター教徒の家で使う火は、祭司長の家で使う火、祭司の家で使う火、平信徒の家で使う火をそれぞれ集めてきて、それらをひとつの火に統一する。この火について先の作業を 40 回くりかえす。こうして得られた火に、火打ち石でおこされた火か木片の摩擦によっておこされた火の一方を加えて、ひとつの火に統一する。この火について先の作業を 144 回くりかえす。

III

16 の異なる火について、一定の回数儀礼をほどこしてえた火が、この収集の儀礼につづく清祓の儀礼に用いられる。

さて、時代をさかのぼると、この収集の儀礼を想起させる内容がアヴェスタ、パーラヴィーの中に見いだせる。火の収集の儀礼は、死体を焼く火に限って述べてきた。その際火を収集するゾロアスター教徒がリマン清祓儀

礼を行なわねばならないことと、死体を焼く火の炎から穴のあいた杓に盛られたビクダン、乳香に火を燃えつかせねばならないことは、他の15の火にあてはまらないにしても、その後につづく儀礼の内容は、回数こそ異なれ同じである。この死体を焼く火に言及しているのがアヴェスタ、パーラヴィ、ヴィデーヴダード (vidēvdād) 第8章73-80節である。以下、その訳をかかげる。

第8章 73節

Dātarə gaēʾānam astvaitinam ašāum
yaʾ aēte yōi mazdayasna pāda ayaṇtəm vā tačantəm vā
barəmnəm vā vazəmnəm vā ātarəm nasupākəm frajašan
nasūm hampačan nasūm hāvayan kuʾa tē verezyan aēte
yōi mazdayasna.

「物質世界の聖なる創造者〔アフラ・マズダ〕、マズダヤスナ教徒 (Mazdayasna) が、歩いているとき、あるいは走っているとき、あるいは〔馬に〕乗っているとき、あるいは馬車に乗っているとき (vazəmnəm)、死体を焼く火 (Nasupākəm) の近くにきたとき、かれら〔マズダ・ヤスナ教徒〕は死体 (Nasu) を熱すべきでしょうか (hām-pačan)、死体を焼くべきでしょうか (hāvayan)、かれらマズダヤスナ教徒はいかがすべきでしょうか。」

第8章 74節

Āaʾ mraoʾ ahurō mazdā̌ ava aētəm nasupākəm jana-
ēta ava hē janayən apa aētəm dištəm barayən apa aē-
təm uzdānəm barayen.

「アフラ・マズダ答えていわく、この死体を焼く火を打ちくだけ

(janaēta), この死体を焼く火を打ちくだけ、この燃えている薪 (dištām) を遠くへ運べ (apa barayen), 死体をつけて燃えている薪 (uzdānəm) を遠くへ運べ。」

第8章 75 節

Āvraṭ hača bānuwē aēsmā frasao (—) čayāhi yaṭ vā aētanḥam urvaranām yaṭ ātarə—čivranām yaṭ vā aētəm ātarəm uzdarəzə aētayā urvarayā ātarəčarəš vīča barōiṭ vīča šāvayōiṭ yaṭ a āsištəm frāvayōiṭ.

「その〔死体をつけて燃えている〕火から離れて、炎 (bānuwē) を通して、火の精をもつ木の片 (ātarə-čivranām) か、あるいは燃えつきやすい木の片 (ātarə čarəš) に、その〔死体をつけて燃えている〕火を移らせよ、その〔死体をつけて燃えている〕火を遠くへ運べ、死体を焼く火を散らしてしまえ (vīča šāvayōiṭ), 死体を焼く火がそれだけ早く消えるように (frāvayōiṭ).」

第8章 76 節

yaṭ a taḍa paoirīm handarəza zəmə aētaṭ paiti nidaiṭ ita avavaṭ hača āvraṭ nasupakāṭ yaṭ a fratarə vītastiš vīča barōiṭ vīča šāvayōiṭ yaṭ a āsištəm frāvayōiṭ.

「そして、最初の薪の束 (handarəza) を地面に置くべし、死体を焼く火からおよそ 23 cm (vītastiš) 離れたところに、〔死体を焼く火を〕遠くへ運べ、〔死体を焼く火を〕散らしてしまえ、死体を焼く火が、それだけ早く消えるように。」

77 節～78 節にかけて、76 節に述べられた作業を 9 回くりかえすように記されている。

ナオサリにおける火の収集儀礼とアヴェスタ、パーラヴィ 第8章 73～80節の内容を比較すると、後者においては死体を焼く火（Nasupak）に限られてはいるにもかかわらず、火の炎を通して燃えつきやすい材料に火を燃え移らせ、さらにその作業を何度かくりかえす仕方に類似がみられる。アヴェスタ、パーラヴィにいう薪の束（handarəza）は、ナオサリの場合のビャクダン、乳香ではないかも知れない。アヴェスタ、パーラヴィにおいては、「歩いているとき、あるいは走っているとき、あるいは〔馬に〕乗っているとき、あるいは馬車に乗っているとき」と表わされているように、73～80節の状況は聖なる火をつくるためのものとは考えにくい。しかし、アヴェスタ、パーラヴィ文献の中には、他に73～80節に記されている儀礼と同じものにふれている箇所がないこと、また第8章 73～80節につづく 81～96節の内容を参照するときに、第8章 73～80節とナオサリにおける慣行との類似はまったく意味のないことではないと思われる。81～96節（これに関しては西日本宗教学会誌第6号 pp. 26-29 参照）には、16の異なる火が一節ごとに1つずつ紹介され、それらを「火の運ばれるべき、法の認める正しい場所」（Dāitīm gātūm）に運ぶべしとし、その行為に対しては、「燃え木」（ātaresaokanām）の数量で計った分の報いがあることが述べられている。ここでも、16の異なる火について、「燃え木」の数は相違しているし、聖なる火をつくるために16の異なる火を収集するように規定しているのでもないが、火を運ぶ行為そのものは、運ぶ火の内容は異なるにしても、火を絶やすまいとする態度であろうし、少なくとも、徳であると考えられている。

ここで、火を運ぶという行為に言及していく。アヴェスタ、パーラヴィから時代をくだって、おそくとも 15 C から 17 C のイランにおいては、火を運ぶということに関して以下のような慣行があった（B. N. Dhabhar, 1932, pp. 56-72）¹⁹⁾。ゾロアスター教徒の家で使われる火は、3日使われたら、その火の炎を通して燃えやすいものに火は燃え移られ、燃えついた方の火は、アータシュ・アーダラーンに運ばれ、そうして4カ月と10日

を経て、アータシュ・アーダラーンはアータシュ・ベーラームに運ばれなければならない²⁰⁾。4カ月を経て、それができないときは、1年以内にそうすべきである。ゾロアスター教徒の家で使われる火が、アータシュ・アーダラーンに運ばれると、それは徳であり、もしその火が運ばれずに消されると罪であり、その家の財は減り、男子の後継ぎも減る。この慣行は、ゾロアスター教徒の家の火に言及するのみで、アヴェスタ、パーラヴィに於けるようなその他15の異なる火についてはふれていないものの、火を一定の場所に運ぶべしとし、その行為そのものを徳とする方向では類似している。ここでは、火を消し絶やさないようにする態度が強調されているように思われるが、これとは異なる目的から火を運ぶ行為に言及しているものもある。同じく15C~17Cのイランにおいては、すべての平信徒の居住区には、少なくとも平信徒が10世帯集まったら、その中央に、アータシュ・アーダラーンをつくるべきだとしている。平信徒は、自分の家の火を3日ごとに、あるいは7日ごとに、アータシュ・アーダラーンに運び、1年ごとにあるいは3年ごとに、しかも年の終りのガー (Gah)²¹⁾のときに、アータシュ・ベーラームへ運ばねばならない。ここではアータシュ・アーダラーンをつくることを強調した上で火を運ぶことにふれている。アヴェスタ、パーラヴィの場合には、聖なる火をつくるために火を運ぶべしとはしていないが、15C~17Cにおいては聖なる火をつくらねばならないとする態度がみられるのである。

ナオサリでは、聖火殿を、その中におさめられている火の名称でナオサリ・アンジュマン・アータシュ・ベーラーム、ミノチャ・ホムジ・アータシュ・アーダラーンなどと呼ぶこともあるが、通例はダ・リ・メール (Dar-i Mihr 文字どおりには、ミトラの門の意味)、あるいはアギーアーリー (Agīārī 火の家) と呼んでいる。呼称のいかんにかかわらず、すべての聖火殿には聖なる火が維持されているのだが、かつては火が永続的に維持されてはいなかったという史料が残っている²²⁾。この史料によると、パーシーは自分の家のかまどの火に対して祈りと供犠をなしていた²³⁾。しかし祭

司が儀礼を行なう場所や建物は必要であると考えられ、儀礼堂ともいうべきものが建てられた。この儀礼堂には、パーウィ (Pāvi 5~6 cm の幅の浅い溝で囲まれた儀礼を行なうための空間)、井戸、ヤシの木、ザクロの木が付設していた。パーシーの祭司は、自分の家のかまどの火を日々この儀礼堂内のパーウィに運び、その火を聖別しては儀礼に用い、儀礼を終えるとその火をもって家に帰っていた²⁴⁾。

ナオサリに存するダ・リ・メールは最も古く²⁵⁾、12 Cにカムディン・ザルトシュト (Kamdin Zartosht) という祭司によって建てられたが、先に述べた慣行はつづけられ、それは儀礼堂の役割は果しつつも、その中に永続的に維持されるべき聖なる火は存せず、1796年にはじめて聖別された火がおさめられた。それゆえに、15 C後半、サンジャン (Sanjan 略図参照) の祭司が、ナオサリにアータシュ・ベーラームを運び込んで、聖火殿におさめ、そこでナオサリのパーシーのために宗教儀礼を行なったとき、ナオサリのパーシーはこの聖火殿をかれらのダ・リ・メールから区別してアータシュ・ニー・アギーアーリー (Ātaš-nī Agiārī 火のおさめられているアギーアーリー) と呼んだ²⁶⁾。8 Cの中葉から11 C~12 Cにかけて、イランから主にインド西北部に移住したゾロアスター教徒・パーシーは、自分の家のかまどの火に対して祈り、供犠をする慣行を15 C後半ぐらまで保っていたが、15 C~17 Cにわたって、イランのゾロアスター教徒とのあいだに書簡の交換、祭司の交流を行ない、それを通してイランにおいては聖なる火をつくっている事実を知らされ²⁷⁾、その後18 C~19 C後半にかけて数多くの聖なる火と聖火殿をつくったと考えられる²⁸⁾。アヴェスタ、パーラヴィ第8章73~96節には、聖なる火をつくるために、死体を焼く火を浄め、死体を焼く火を含め16の異なる火を「火を運ぶべき、法の認める正しい場所」に運べとの規定はないが、おそくとも15 C~17 Cには聖なる火をつくる慣行が存した。パーシーはイランのゾロアスター教徒の祭司との接触によって、聖なる火をつくる事実に接し、インドにおいて18 C~19 C後半にかけてそれを実行したのであろう。アヴェスタの含

みうる時代に、聖なる火を現在ナオサリにおけるようにつくっていたかどうかは今のところわからない。しかし、アヴェスタ、パーラヴィ、グジャラティの文献によるかぎりでは、アヴェスタ、パーラヴィ第8章73～80節における死体を焼く火を忌避する態度²⁹⁾、またそれに関する儀礼、さらにアヴェスタ、パーラヴィ第8章81～96節に含まれる16の異なる火とそれらを一定の場所に運ぶ慣行は、現存するゾロアスター教徒・パーシーにおける聖なる火をつくる過程の一部である、16の異なる火を集める儀礼に類似していると考えられる。

注

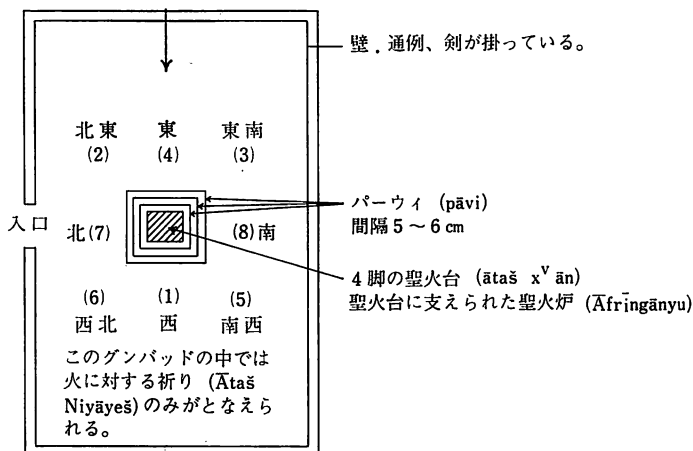
- 1) パーシー (Parsis) は Parsees とつづられるときもある。Pārsī は Parsa (O. P.) から派生し、古代 Iran 南西部に位置した地域名とされる。また、そこに住む人々をもさす名称であった。Pārs のかたちで出てくるときもある。同じく地域名である。Pārs の形容詞形 Pārsik は、かつて Pārs に住む人々をあらわすだけでなく、そこで使われていた言語をも示している (K. Mirza, 1977 pp. 1-4)
- 2) Naosari または Navsari は Nao-Sari i. e., New Sari から派生したとする説もあれば、Nusaripa からきたとする説もある (M. M. Murzban, 1917 p. 53)
- 3) Bhagaria は文字どおりには 'sharer' の意味で、それぞれのパンターク (Panthāk 後に言及) に応じて宗教儀礼を行なう権利と、それによって生じる経済的報酬の分配に与る権利を共有する祭司のことである。ナオサリには現在 57 名の祭司がいる。
- 4) Kaka Pahlun, Kaka Dhunpal, Asha Faredoon, Maheear Faredoon, Chanda Faredoon がそれらの名称である。
- 5) 聖なる火に燃料を加える儀礼はブイ (bui) と呼ばれる。Pahl. bui は Av. baodha にあたり、「香り」を意味する。パーシーは、この儀礼をブイ・デウィ (bui devi 文字どおりには、芳香を与えるの意味) と呼ぶ。アータシュ・ダードガー (3種類の聖なる火のうちの第3等級の火) には、祭司だけでなく平信徒も燃料を加えることができる。アータシュ・アードラーン (3種類の聖なる火のうちの第2等級の火) には、祭司のみがその資格のいかんをとわず燃料を加えることができる。アータシュ・ベラーーム (3種類の聖なる火のうち第1等級の火) には、祭司のみが、しかもクープ (xūb 10日にわたるバレシュヌ

ヌームという清祓儀礼を経た翌朝にヤスナの儀礼を行なうこと）を終えている祭司だけが、燃料を加えることができる。このクープは4日間だけ有効なので、それを過ぎるとまたくりかえして行なわねばならない。ブイの儀礼は、1日に5回、ガー（gāh、これについては本文においてすでにふれた）にそって行なわれる。ガーごとに聖なる火への祈り（アターシュ・ニーアーシュ Ataš Niyāyeš）が唱えられる。アターシュ・ペーラームには、それぞれのガーごとに、11回、9回、7回、7回、6回となっているが、アターシュ・アーダラーン、アターシュ・ダードガーには一度だけでよい。燃料には、ビャクダン、シタンなどの常緑喬木を乾燥させ15~20cmの長さの片にしたものを用いるが、アターシュ・アーダラーンとアターシュ・ダードガーには一片のみ加えられるが、アターシュ・ペーラームには6片が一定の形式にそって加えられねばならないばかりか、ビャクダン、シタンに優先してバワルという常緑喬木が与えられる。ここで、アターシュ・ペーラームのブイの儀礼にふれる。クープを終えた祭司は、ガーの始めに身体を浄める（クスティ・パードヤーブ kustī pādyāb）。第1、第2、第3のガーにおいては、人の魂を守るサローシュ（Sarōš）への祈り（バージ Bāj），それぞれのガー（gāh）の祈り、太陽への祈り、（Koršed Niyāyeš），ミトラへの祈り（Mihr Niyāyeš）が唱えられる。第4、第5のガーにおいては、人の魂を守るサローシュへの祈り（Sarōš Bāj），それぞれのガー（gāh）の祈り、と先の第1、2、3のガーにおける太陽への祈り、ミトラへの祈りにかわってサローシュへの祈り（Sarōš Yašt と Sarōš Hadoxt）が唱えられる。こうして祭司は聖火壇に入る。白い手袋をつけ、乳香を少々聖なる火の上に置き、つぎに6片のビャクダンを聖なる火の上に以下のごとく加える。祭司は聖火炉の前に東に面して立ち、ビャクダン2片を西→東の方向に置く。つぎに南に面して立ちビャクダン2片を北→南の方向に置く。それから西に面して立ち、東→西の方向にビャクダン2片を置く。一組2片のビャクダンは3段に重なるように、しかしそれぞれは別々に離して置かれねばならない。このようなビャクダンの組み方はマーチ（māči 王座の意味）と呼ばれ、この儀礼のためにビャクダンをささげる行為もマーチと言われている。祭司はマーチを終えると、聖火炉を支える石板（クワン xʷān）を水で洗う。このとき「アフラ・マズダのよこびのために」（xšnaōθra Ahurahe Mazdaō）とアシュム・ヴォフーの祈り（Ašem Vohū「正義は絶対の恵み。正義は美德。最高の正義を聖別する人は幸福」）を3回唱える。つぎに、善思（フヴァルシュタ Hvaršta）と声に出して言いつつ、ビャクダンと乳香を聖なる火に加え、手に金属製の杓（čamač）をもって、聖火炉のまわりを廻る（チャク・ファルウン čak farvun、円をまわる）。

祭司は（1）～（8）の順にまわり、それぞれの地点でつぎのように祈りを唱え

ゲンバッド (Gumbad) の略図

パレシュヌームを済ませ、クーブを
経た人だけが入ることができる。



る。(J. J. Modi pp. 236-237)

- (1) 「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」
- (2) 「善思の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」。
- (3) 「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」。
- (4) 「善言の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」。
- (5) 「火を通して、御身アフラ・マズダを崇める」。
- (6) 「善行の供えを通して、御身アフラ・マズダを崇める」。
- (7) 「われらの思想の啓かれるよう」
- (8) 「われらの言葉の啓かれるよう」
- (9) 「われらの行為の啓かれるよう」

これらの祈りを唱え、祭司は聖なる火の上にビャクダンと乳香を置き、先に述べたように、ガー (gāh) にそって聖なる火への祈り (アータシュ・ニーアーシュ *Ātaš Niyāyeš*) を決められた回数唱える。それを最初に唱えるときは、はじめの部分において、もう一人の祭司は悪思 (ドウシュマタ *duš-mata*) 悪言 (ドウズクタ *duzhuxta*) 悪行 (ドウズワルシュタ *duzvaršta*) と発しながら鈴を3回ずつ9回ならす。また、第1回目のアータシュ、ニーアーシュの終りの部分においては、祭司は杓で聖火炉の灰の上に2つの円をえがく。この円は第2回目のアータシュ・ニーアーシュを唱え終ったときに消される。

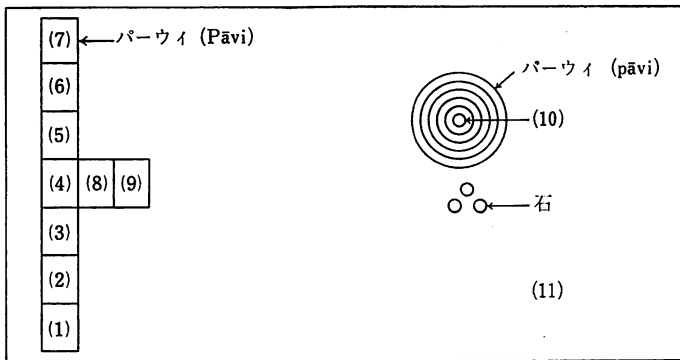
- 6) 注 (5) を参照。
- 7) この場合は、聖なる火をつくった人、聖火殿を建てた人のことを表わす。
- 8) 火と火が混ぜ合わされないことのほかに火と火は同じ部屋の中に保たれることもない。たとえばナオサリの聖火殿には2つの聖なる火が維持されているが、それぞれの火は壁によって隔絶された聖火壇におさめられている。
- 9) ナオサリにおいては牛の糞を乾燥させて燃料として用いてもいた。
- 10) 西日本宗教学会誌第6号 pp. 33-37 参照。すべての聖なる火について、現在知りうるかぎりの歴史を示した。
- 11) Minocher Homji Ādarān がこれにあたる。ミノチャ・ホムジはもともとバガス 祭司であったが、1686年に自分の家の敷地内にアギーアーリー (Agīārī 聖火殿) を建て、バガスの火と区別した。
- 12) かつてはアータシュ・ダードガーにかぎって平信徒が世話できた。しかしこの事実は、聖火殿に永続的に火が維持されるようになる以前のことである。
- 13) バサム (Bhasam Av. ātryō-paiti irista, Pahl. ādurastar) と呼ばれ、清祓儀礼に用いられるだけでなく、祈りのあとで祭司によって額につけてもらう。
- 14) この火は Nasupāk といわれている。Nasu はゾロアスター教の中では重要な概念のひとつである。パーシーはナスを ① ヒックラ (hixra: 乾いたナス) と②ナス (Nasu: 湿ったナス) に分け、前者に髪、爪、死体から得られた骨が含まれ、後者には血、唾、膿汁、死体が含まれるという。ナスは「他を汚す力」のそなわった不浄の主体と考えられている。したがって Nasupāk は死体を焼く火のみに限定できない面もある。
- 15) パーシーは身体を浄めるのに4つの儀礼のいずれかにうったえる。それぞれの儀礼は、目的と方法において異なる。Pahl. pādyāb は Av. paiti-āp にあたる。文字どおりには水 (āp) をふりかける (paiti) を意味する。4つの清祓儀礼のうちで最も簡単な形式のものである。以下その儀礼の内容を示す。まず、'xšnaōθra Ahurahē Mazdaō' 「アフラ・マズダのよこびのために」と唱えたあと、アシェム・ヴォフー (Ašem Vohū) の祈りを唱える。この祈りの意味はつぎのごとくである。「正義は絶対の恵み。正義は美德。最高の正義を聖別する人は幸福」。これを唱え終ると、顔、手足を水で洗う。つぎに拭く。最後にクスティ (kusti) を行なう。Pahl. kusti は Av. aiwyāonghana にあたる。「方向」、「腰」、「境界」を意味する (J. J. Modi, pp. 183-184)。羊毛製の紐で、パーシーはイニシエーション (ナオジョート Navjote) を経て、これを聖なるシャツ (スドレ sudreh) の上から腰にまく。いまや、このクスティをいったん解き、背中ではひとつ結び目をつくり、腹でもうひとつ結び目をつくる。その間、先のアシェム・ヴォフーの祈りをとなえる。パード・ヤ

ーブは朝起きたとき、大小便のあと、食事の前、祈りを唱える前に行なわれねばならない。

- 16) 二人の間に手で紐を保つ行為で、死体運搬人 (Nasāsālār) が死体を運ぶとき、葬送の行列を組むとき、火の清祓儀礼、アータシュ・ペーラームの灰を取るとき、火の聖別の儀礼のときなどにこれを行なう。Pahl. paiwand は「つながり」「子孫」の意味をもつ。またパーウィ (pāvi 宗教儀礼を行なう空間で、幅 5~6 cm の浅い溝で囲んである) も木片のパイワンドでつながれるとパーウィ内の聖度は変わらないで保たれると考えられている。
- 17) Av. Sraoša から後に Pahl. Sarōš あるいは Pahl. Srōš と変形。「聴く」それゆえに「服従、従順」の意味。Avesta の中では、Sarōš は「宗教を啓示する人 (daenō-disō)」、「聖なる言葉 (マントラ mǎnθra) の顕現」としても知られている (K. Mirza, p. 101)。サローシュは人と神をつなぐ存在で、昼夜、人の魂をまもるが、とりわけ夜にその保護は強まる。サローシュへの祈りがもっぱら夜に唱えられるゆえんである。昼夜、家や人をまもる犬と、夜明けを待って時を作るニワトリがサローシュとむすびつけられる理由でもあろう (J. J. Modi, pp. 434-435)。サローシュは悪魔 (デーウ Dēv) や虚偽 (ドウルジ Druj) から人をまもる (B. N. Dhabhar, p. 15)。人の死後 3 日のあいだ、死者の魂をまもる。4 日目の明け方に、死者の魂はチンワットの橋 (činvatō peretu) に行き、裁きをうける。そのあいだ、サローシュは死者の魂をまもる。そこで、人の死後 3 日のあいだ、サローシュのため以外にヤスナ (Yasna) の儀礼が行なわれるべきでない (B. N. Dhabhar, pp. 166-167)。
- 18) Pahl. rīman は Av. ri から派生している。「不浄のもの、汚物」の意味である。ナオサリでは、死体によって生じた不浄をこの語で表わす。一人の祭司と一人の平信徒が、死によって不浄になった人に対して行なう儀礼もリマンと呼ばれる。いまこの儀礼にふれていく。祭司はクーブ (xūb) を経ていなければならない。バレシュヌーム (Barešnūm) 清祓儀礼 (10 日間にわたる清祓儀礼。本来、死によって引き起こされた不浄に接した人を浄める儀礼であるが、ナオサリではすべての宗教儀礼を行ないうる祭司の資格をとるときにもこの儀礼を行なう。バレシュヌーム・ガー barešnūm-gāh と呼ばれるバレシュヌーム清祓儀礼のための場所において、二人の祭司が行なう。聖なる牛の尿、水、聖なる火の灰、等を用い、犬も出てくる。いまここではバレシュヌーム儀礼には言及しえないので、これについては火の清祓儀礼との関連でふれていきたい)を終えた朝にヤスナ (Yasna) の儀礼を行なえばクーブを得る。

リマン清祓儀礼には以下のものが必要である。聖なる牛 (ワラスヨジ varasyoji) の尿、聖なる水 (アーウ Āv), アータシュ・ペーラーム (Ātaš Bahrām 3 種類の聖なる火のうちで最も等級の高い火) の灰 (バサム Bha-

sam), 水さし 2 杯の水（ひとつは大きく、もうひとつは小さい）、金属製のカップ 2、ザクロの木の葉、9つの節をもつ棒（ナオガー Naogar）2 本（この棒の一本には、端に聖なる糸で金属製のスプーンが結びつけられ、もう一本には端に聖なる糸で金属製の爪が結びつけられている）。聖なる牛の尿、聖なる水、聖なる火の灰については、これらが聖別される儀礼があるのだが、ここでは省く。リマンはできるだけ人々が足をふみ入れない空き地で行なわれる。地面につぎのような用意されねばならない。（Pāvmahal, p. 31. J. J. Modi, p. 155).



(注) パーウィは地面に溝（幅 5.6 cm, 深さ 2.3 cm）を描くか、砂を盛るかしてもうける。この中に、不浄になった人がいる。そこでパーウィは、この中にいる人の影が外にいる一人の祭司と一人の平信徒にさしかからぬように、またパーウィの中にいる人が風上にたつことのないようにもうけられねばならない。

祭司はパーウィ (1) の中に聖なる牛の尿、水、聖なる火の灰を置く、身体を浄める儀礼（パードヤーブ pādyaḥ これについては先にふれた）を行ない、聖火殿に付設している井戸に行き水さしに水を汲む。このあと、白い綿のスポン（イジャール ijar）と白いマスク（パダン padan）を身につける。2つの金属製のカップを聖なる灰で洗い、水で3度洗う。このカップを乾かした後、一方に聖なる牛の尿と聖なる灰、他方に聖なる尿を入れる。これを終えて、水さしを聖なる灰であらい、水で3度洗い、聖なる水をその中に入れる。こうして祭司はパーウィ (1) へ引きかえす。このころ、不浄を浄めるべき人が、服を脱ぎ地中に埋め、パーウィ (7) に入り腰をおろす。これ以後、どのように動くかについては、(11) に立っている平信徒が無言のうちに身ぶり手ぶりで指示する。祭司は不浄を浄めるべき人には近よらない。かれの影がさしかかってもな

らないし、風が不浄を運ぶかもしれないからである。祭司は金属製のカップから、卵のからに聖なる尿を注ぎ、ザクロの木の葉一枚をパーウィ (9) に置く。

(11) に立っている平信徒がこれをパーウィ (6) に置き、不浄を浄めるべき人に、ザクロの木の葉をかみ、卵のからに入っている聖なる尿を3回で飲みほすよう指示する。卵のからに直接口をつけてはならない。聖なる尿を飲み終えたら、卵のからはつぶされて、土中に埋められる。ここで祭司はパーウィ (1) からパーウィ (3) まで、右手に9つの節のある棒（端に聖なる糸でスプーンが結びつけてある）を、左手には聖なる尿を含む金属製のカップをもって進む。そこから棒を用いて聖なる尿を不浄を浄めるべき人の両手に15回注ぎ、この聖なる尿を体にふりかけさせる。祭司はパーウィ (1) にもどり、少量の砂をとり、パーウィ (3) に進んで、先のように15回にわたって砂を与え体にすりつけさせる。祭司はパーウィ (1) にもどり、小さい方の水さしをとりあげ、パーウィ (3) に進んで、先のように15回にわたって水を与え、体にふりかけさせる。祭司はパーウィ (1) にもどり、大きい方の水さしをとり、パーウィ (9) に置く。(11) に立っている平信徒がこの水さしをとり、不浄を浄めるべき人にパーウィ (3) を離れ、パーウィ (10) に行くよう指示する。平信徒は水さしからゆっくりと3回にわたって水を注いでやる。いまや不浄は浄められた。

- 19) この慣行に関しておよそ15の書簡が残っており、ここに記した内容は、それらの書簡の骨子のみをとりだしたものである。数字などに若干の異なりがみられるが、火を運ぶという行為と聖なる火をつくるという態度については一貫していると考えられる。
- 20) 火を運ぶ行為の内容を具体的に示すことはむづかしいが、例えばアータシュ・ダードガーをアータシュ・アーダラーンに運び、火と火の間にパイワンド (paiwand これについては注 (16) を参照) として杓 (čamač) や木片を用い、アータシュ・ダードガーが消えるのを待つ方法は今でも行なわれている。アータシュ・ダードガーとアータシュ・アーダラーンとの間でこれを行なうのは、どのパーシーにも許されているが、アータシュ・アーダラーンとアータシュ・ベーラームとの間でこれを行なえるのは祭司だけに限られている。
- 21) パーシーは1カ月を30日で区切り、12カ月をもって360日とし、これに5日を加えて1年365日とする。この5日はガーハンバール (Gāhambār これについては別稿にてふれる) と呼ばれ、家族あるいは村、町単位でいろいろな儀礼を行なったり共食に参加したりする。
- 22) これについては、ナオサリのダストゥルジ・メルジ・ラーナとダストゥルジ・フィローズ M. コトワルの教示をえた。F. M. Kotwal, Some Observations On The History Of The Parsi Dar-i Mihrs においても、

この内容に関する記述がある。

- 23) 15 C～17 Cのイランにおいても、聖なる火に羊や山羊の肉を供犠（Zur あるいは Zohar）していた（B. N. Dhabhar, 1932 pp. 64-72）。
- 24) 聖火殿の中で行なわれる儀礼は、パーウィ（pāvi）の中でのなされるが、パーウィは通例複数もうけられているので、場合によってはアータシュ・ダードガーを一定の儀礼（これについては別稿にてとりあつかう）にそって、それぞれのパーウィに運び、祭司が儀礼を終えると各々使った火をダードガーにもどさねばならない。もちろん、一人の祭司がパーウィ内で儀礼を行なった場合も同じである。
- 25) このダ・リ・メールは、「大きなミトラの門」（The Vaḍi Dar-i Mihr）、「大きな、火の家」（The Moṭi Agiārī）または「古い、火の家」（The Junī Agiārī）と呼ばれ、他のダリメールと区別している。
- 26) ①ダ・リ・メールについては、ブローチ（Broach）にも似たような伝承が存している。バルチャ祭司（Bharucha Mōbeds）によると、ダ・リ・メールは12 C後半に祭司がはじめてこの地にやってきたときに、地下にもうけられた。そのダ・リ・メールの上に祭司の家族が住んだ。パーウィ、井戸、庭も付設していた。
 ②およそ1660年ごろに、バルサル（Balsar）のパーシーがナオサリのパーシーを説得し、シャプル・ラナ（Shapur Rana）という祭司をバルサルに派遣し宗教儀礼を行なってもらうこととした。当時、バルサルには26世帯のパーシーが住んでいたが、その村の入口の門の近くに、アギーアーリー（Agiārī）をもうけ、その横にシャプル・ラナの家族のための家を建てた。このアギーアーリーの中には、いかなる火も存していなかった。
 ③1680年ごろに、同じくバルサルにジャマスプ・バイジ（Jamasp Bhaiji）という祭司が招かれ、ひとつのアギーアーリーが与えられている。これは1819年に修復されているが、そこにも火はおさめられていなかった。
- 27) イラニ・ザルドゥシュティス（Irani Zardushtis）と呼ばれるイランのゾロアスター教徒との接触は、スラト（Surat 略図参照）を通して行なわれていた。ここにおいてアーダラーンは1771年につくられ、当時すでにチョウキ・モラ（chowki Molla）によって建てられてしまっていたダ・リ・メールにおさめられた。もうひとつのアーダラーンは18 Cにパーシーの個人の家におさめられていたらしい。
 ボンベイにおいては、1672年ごろにモディ・ヒルジ・ワッチャ（Mody Hirji Waccha）によってダ・リ・メールがつくられた。しかし、これについても聖なる火はおさめられていなかった。
- 28) ダードガーやアーダラーンをつくる慣行は、18 Cから19 Cにかけて、ボンベイやカルカットやカラチなどの他の町へ広がっていく一方で、グジャラト州

西北部のかつてのパーシーの拠点となった町や村にも広まっていく傾向をとった。

- 29) これはゾロアスター教における宗教的思考を理解しようとするとき、重要な事柄のひとつであるが、この問題については火の清祓儀礼との関連で考察しようと考えている。

参 考 文 献

- 1) Bājadarāṇane lagatī pāvmahal nī kriyāo, 1307, Navsari.
- 2) Dīshā—pōṭhī, 1302, Navsari.
- 3) Mary Boyce, A Persian Stronghold of Zoroastrianism, Oxford, 1977.
- 4) Mary Boyce, A History Of Zoroastrianism, Leiden/köln E. J. Brill, 1975.
- 5) J. J. Modi, The Religious Ceremonies And Customs Of The Parsees, Bombay, 1922.
- 6) K. N. Seervai and B. B. Patel, Gujarat Parsis, 1898.
- 7) M. M. Murzban, The Parsis In India, Bombay, 1917.
- 8) K. Mirza, The Zoroastrian Religion, Bombay, 1977.
- 9) F. M. Kotwal, The Authenticity Of The Parsis Priestly Tradition, Bombay 1976.
- 10) S. H. Hodivala, Studies In Parsi History, Bombay, 1920.
- 11) B. N. Dhabhar, The Persian Rivayats of Hormazyar Framarz, Bombay, 1932.
- 12) Mary Boyce, On The Sacred Fires Of The Zoroastrians, BSOAS XXXI: i, 1968.
- 13) Mary Boyce, The Pious Foundations Of The Zoroastrians, BSOAS XXXi 2, 1968.
- 14) D. H. Jamasp, Vendidad Vol. 1, Bombay, 1907.
- 15) B. T. Anklesaria, Pahlavi Vendidad, Bombay, 1949.